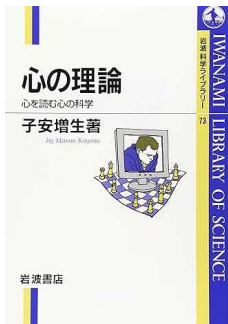


# 「心の理論」 Theory of Mind

こころのりろん



// 「心の理論」と呼ばれる研究分野の提唱は、最初、霊長類動物の研究者によって行なわれた。1978年に、アメリカの動物心理学者デイヴィッド・プレマックとガイ・ウッドラフは、「チンパンジーは心の理論を持つか」という論文の中で、チンパンジーなどの霊長類動物が、たとえば「あざむき」行動のように他の仲間の心の状態を推測しているような行動をとるという事実注目し、このような行動を「心の理論」という考え方で解釈することを提唱した。// (p11)

見出し なぜ「理論」とよぶのか

// 「心の理論」という言い方は、正直に言ってわかりにくい。

// (以下、略 p13)

見出し 「誤った信念」課題 (p96)

// プレマックとウッドラフの1978年の論文は、霊長類学者だけでなく、哲学者や心理学者の間でも大きな反響を呼んだ。このプレマックらの提案を受けて、オーストリアの心理学者ハインツ・ヴィーマーとジョセフ・パーナーは、「誤った信念」課題と呼ばれる実験方法を開発し、幼児期の発達過程を調べる研究を1983年に発表した。//

★//この「誤った信念」課題に対して、3歳～4歳児はそのほとんどが正しく答えられないが、**4歳～7歳にかけて正解率が上昇する**というデータが得られた。パーナーらは、その後の一連の研究の結果から、「心の理論」の出現の時期がおよそ4歳頃からであるとしている。結果の解釈はどうか、3歳以前の子どもたちが「誤った信念」課題に対して正解できず、4歳以降になると正解率が高くなるという事実は、その後の追試研究でも一貫して見られている。//

パーナーらの「誤った信念」課題を簡略化して説明すると次のようになる。最初に、人形劇などによって、次のようなお話を子どもに聞かせる。

「マクシは、お母さんの買い物袋をあける手伝いをしていきます。マクシは、後で戻ってきて食べられるように、どこにチョコレートを置いたかをちゃんとおぼえています。その後、マクシは遊び場に出かけました。マクシのいない間に、お母さんはチョコレートを少し必要になりました。お母さんは〈緑〉の戸棚に戻さず、〈青〉の戸棚にしまいました。お母さんは卵を買うために出ていき、マクシはお腹をすかせて遊び場から戻ってきました。」

マクシという男の子を主人公とするこういってお話を聞かせた後、「マクシは、チョコレートをどこにあると思っているでしょうか?」という質問をする。これに対して、子どもが〈緑〉の戸棚を選ぶと、マクシの「誤った信念」を正しく推測することができたということになる。★



ウタ・フリス『自閉症の謎を解き明かす』  
東京書籍 1991年

//5歳までには、子どもは早くもこうした一人前の心の理論を使えるようになります。//  
(p159)

//自閉症の子どもは、自分の考えとは違った考えをもつ人もいることを理解しないかもしれないとの予測を検証するには、それに適した何らかの課題が必要でした。// (p160)

//子どもは4歳以降になれば人は現実とは異なる信念をもつことをはっきりと理解し、それに沿ってその人の行動を予測できることを立証しました。// (p161)



//ほとんどの子どもは、7歳までに他者の感情を言い当てる能力を十分に発達させています//

クリスチャン・キーザーズ『共感脳』麗澤大学出版会 p10

//人間の子供は七歳くらいまでに「他人にも自分と同じ心がある。しかし他人はそこに自分とは違う考え方をもっている」ということが理解できるようになる。これが「心の理論」である。//

福岡伸一『動的平衡』p243

## 他者の発見が、自己を確かにする

「他者／自己」という言葉、「友達／自分」でも同じ意味になる。前者のような堅い言葉をつかわなくてもよいが、心理学は19世紀起原の学問で、それ以前は哲学だった名残ともいえる。

## 他者先んじて自己生ず

…… 小5：**おとな** ※非排他的区分  
—— 移行期 (小3,4)

**7歳 (小2)** —— **4歳「心の理論」**

学童保育 —— 5歳 **幼児** (幼児後期)

異年齢保育 —— 2歳半 (**幼児前期**) ※この期間の前半頃イヤイヤ期

担当制保育 —— 1歳半 ※ハートスケール生成期：山田利行独自

(未満児) —— 0歳 **乳児** 「間主観性」期 胎児

# 間主観性 かんしゅかんせい

//フッサールは、他人知覚は「対の現象」のようなものだと言っていました。その言葉は、けっして単なる比喻ではありません。他人知覚においては、私の身体と他人の身体は対にされ、いわば**その二つで一つの行為をなし遂げる**ことになるのです。//

M.メルロ＝ポンティ『大人から見た子ども』みすず書房 2019年 p194  
※「二つで一つの行為をなし遂げる」は  
「間主観性」の説明となる。

//intersubjectivityという概念は、**間主観性**、相互主観性、共同主観性、間主体性、相互主体性などと、多様に訳出されていることから分かるように、多面多肢的な——**ある意味では曖昧な**——**概念**である。ちなみに筆者の理解では、この概念は少なくとも次の5つの次元に沿って裁断してみることができるように思われる。(1) 二者の身体が意識することなく呼応し、そこに相互的な、相補的な関係が成立するという**間身体的な関係(メルロ＝ポンティ)**の次元〔(2)以下は略〕//

鯨岡峻『ひとがひとをわかるということ』ミネルヴァ書房 2006年 p12

//発達心理学の領域では母子間相互作用という観点からの研究が増え、「行動の同期性」というような行動のことばで子どもと養育者のあいだの関係が語られていくことに、妻〔※〕と共々、何か釈然としないものを感じていました。その釈然としない何かとは、煎じ詰めれば心の問題を避けているということに尽きます。

ここに**間主観性**という概念が登場してくる理由があります。//

(同p11) ※妻……筆者の妻／鯨岡和子

//行動科学批判を旗印に自分の立場を宣言したのが、ちょうど**間主観性**の論文(1986)と同じ年に発刊した『心理の現象学』という私にとっては初めての単著でした。これは従来の行動科学の立場を現象学の観点から批判しつつ、しかし返す刀で哲学的現象学の思弁性、つまりフッサールやメルロ＝ポンティの注釈や読解ばかりにとどまって、一向に人の生き様に迫ろうとしない哲学の思弁的な立場を切り捨てようという、いかにも若気の至りという内容の著作です。// (同p28)



# ハートスケール

山田利行のネーミング・独自理論



心(主体)をはかるものさし

ぶらんこは“乗せてもらう”ことが先。

このときのものさし → [redacted] → → → [redacted]

乗って遊んでいるうちにものさしは太くなる。

何回も乗っているうち〈繰り返す体験〉によって太く丈夫になる。大きくゆすられると、「こわい、やめて」と言ったりする。乗り続けて、ものさしはさらに太く丈夫になる。

丈夫なものさしを自覚するようになると、ぶらんこを大きくゆすってほしくなる。すると、ものさしは ↑ こうなる。太い部分は丈夫になった部分で、両端は経験がまだ浅いので細い。やがて、自分の意思で、おりようと思うようになる。

「体験」は見えるかたちばかりでなく、内言(心の中)の動きが先行し、これは見えない。そして、とうとう見えるかたちの体験に結びつく。このことを理論化したのがヴィゴツキー(1896-1934: ベラルーシの心理学者)の「発達最近接領域」という学習理論。

子どもが今日共同のなかでなし得ることは、  
明日には自分ひとりでなし得る



ハートスケールの原型イメージ

[redacted] □ ぶらんこをおりてみようという気持ちがわいたとき〈赤い枠〉  
↓  
[redacted] — 着地した瞬間、赤い枠は消える。おそらく  
↓  
[redacted] — 幼児は繰り返し、おりて確かめようとするだろう。

1歳半から2歳半、間主観性期の終わり頃が「ハートスケール生成期」ではないだろうかと思っている。初期のものさし → [redacted] の扱い(特に、ものさしのかたちが見えてきた頃)に「戸惑いをもつ」ということが、いわゆるイヤイヤ期だろうかと思っている。

(参考)「主体性(主体)について、理解」を試みる 資料通番12



資料通番12\_2..ver.01 The Renaissance of Childhood 2024.6.16

「心の理論」Theory of Mind

山田利行

拡散歓迎 複写可(許諾無用) <https://193pub.com/>